

生爪を剥ぐ

葉山嘉樹

青空文庫

夏の夜の、払曉に間もない三時頃であった。星は空一杯で輝いていた。

寝苦しい、麴室のようなムンムンする、プロレタリアの群居街でも、すっかりシーンと眠っていた。

その時刻には、誰だつて眠っていない筈であった。若し、そんな時分に眠っていない者があるなら、それは決して健康な者ではない。又、健康なものでも、健康を失うに違いない。

だが、その（時刻）は眠る時刻であったが、（時代）は健康を失っていた。

プロレタリアの群居街からは、ユラユラとプロレタリアの蒸焼きの煙のような、見えな
いほてりが、トタン屋根の上に漂っていた。

そのプロレタリア街の、製材所の切屑見たいなバラックの一固まりの向うに、運河があ
った。その運河の汚ない濁った溜水にその向うの大きな工場の灯が、美しく映っていた。

工場では、モーターや、ベルトや、コムベーターや、歯車や、旋盤や、等々が、近代的
な合奏をしていた。労働者が、緊張した態度で部署に縛りつけられていた。

吉田はその工場に対してのある策戦で、蒸暑い夜を転々として考え悩んでいた。

蚊帳の中には四つになる彼の長男が、腐った飯粒見たいに体中から汗を出して、時計の針のようにグルグル廻って、眠っていた。かますの乾物のように、痩せて固まった彼の母は、寝苦しいものと見えて、時々溜息をついていた。

(一体どうするのが、俺には一番いいのだろう)

彼は、暑さにジタバタする子供の寝顔を、薄暗い陰気な電燈の光に眺めた。

(一番いいのは、俺が首を吊ってしまうことだ！) (だが此年寄のおふくろは？ 三人目の子供を産むために、下の児を連れて県病院の施療病室にいる女房は？ 此二人の可愛い男の子と、それから今度生れる赤ん坊とは？ それはどうなるんだ？ どうして生きて行くんだ？ オイ！)

吉田は大きな溜息をついた。両方の手で拳を固く拵えて、彼の部厚な胸を殴った。

(だが、何とも為方はないさ。俺がよしんば死なないにした処で、——今度の事——で監獄に打ち込まれるとしたらどうだ！ 死んだのと同じことになるじゃないか。いつそのこと……)

「おまい、寝られないのかい？ 又早く出かせなければならぬのにねえ」

おふくろは弱い声で云った。「お母さんも眠れないんですか。わしは今までグツスリ眠

つたんですよ。腹の具合は少しはいいですか？」

（腹の具合が良かろう筈がねえじゃないか、医者にもかけねえ、薬も飲ませねえ、軟かい滋養分も食べさせない、その代りに子供の守をさせてる！ 地獄だ！ 自分で看護婦が入用な、垂れ流しの老人に、子供の守をさせる。死ぬまで車を引つ張る馬のように、死ぬまで苦勞を背負わせるんだ。子供が七輪の炭火の上に倒れても、よう起きないで泣き出してしまふ老人に、——畜生！ 俺は一体どうなればいいんだ。ああ、——明日も早いから——とおふくろは云つてる。明日俺の出かけるのは、工場の前のピケツチングじゃないか！ ふうっ！）

彼は、音のしないように髪の毛をひつ掴んだ。そして憎つたらしく、検束者をでもするよう、やけに引つ張つた。髪の毛は汗でねばねばしていて、ふて腐れたように手にザワザワ捲きついて来た。

——吉田さん、吉田さん。——

暑苦しいために明けつ放した表から、誰かが呼んだ。

吉田はハツとした。

（来やがった。遂々来やがった。何時だ、三時だな、畜生！ 寝込みを踏み込みやがった

な)

彼は、本能的に息を詰めた。そして耳を兔のようにおっ立てた。

「どなた？」

おふくろが、喘ぐように云つたのと、吉田が、「しっ」と押し殺すような声で云つたのと同時であつた。

(為様がない、おしまいだ。これで片がつくんだ。奴等が一段ずつ位と月給が上つて、俺たちや立ち腐れになるんだ)

「誰だい？」

彼は、大きな声で呶鳴つた。

「中村だがね、ちよつと署まで来て貰いたいんだ」

——誰だい——と呼ぶ吉田の声が、鋭く耳を衝いたので、子供が薄い紙のような眠りを破られた。

「父ちゃあん！」

子供の食い取つてしまいたいような、乳色の手が吉田の頸にしがみついた。

「おお、いい子、いい子、泣くんじゃねえ。誰が来たって、どいつが来たって、坊を渡す

こつちやねえからな」

彼は、子供を確り抱きしめた。そしてとりたての林檎のように張り切った小さな頬に、ハムマーのようにキツスを立て続けにぶつつけた。

M署の高等係中村は、もう、蚊帳の外に腰を下して、扇子をバタバタ初めていた。

「今時分、何の用事だい？ 泥棒じゃあるめえし、夜中に踏み込まなかつたって、逃げも隠れもしやしねえよ」

（此儘行つたんじや困る。家中に二十銭しかない。二十銭では何ともならない。何とか都合しといてからでないといけない。おふくろも子も乾上つちまう。さて）

吉田は、そう考えることによつて、何かのいい方法を——今までにもう幾度か最後の手段に出た方がいい、と考えたにも拘らず、改めて又、——いい方法を、と、それが汗の中にもあるように汗みどろになつて、全速力で考え初めた。だが、汗は出たが、いい考えが浮く筈がなかつた。

「明日でもいいでしょう、と云つたんだが、どうしても直ぐに署長の命令だからね、済まないが、直ぐに来て貰いたいんだ。直ぐに帰すからね」

中村は、こう云うと、又煽ぎ立てた。

(へ、すぐに帰す！ 極り文句を云つてやがらあ)

「何しろ夜中じゃしようがないよ。子供を手離せないもんだからな。嬢が病院に行つてから、一人は俺が見てやらなげや、ならないんだよ。まあ、朝まで待つて呉れよ」

子供は、吉田と中村との話を、鋭く聞いていた。そして、自分が生れると直ぐの年から、母親の背に縛りつけられて、毎年、警察や、裁判所や、監獄の門を潜つたことを思い出した。

「父ちゃん、いやだよ。行っちゃいやだよ」

泣き声と一緒に、訴えるような声で叫んで、その小さな手は、吉田の頸に喰い込むように力強くからまつた。

人生の、あらゆる不幸、あらゆる悲惨に対して殆んど免疫になつてはいた吉田であつた。不幸や悲惨の前に無力に首をうなだれる吉田ではなかつた。どんな困難な境遇に立つても客観的な立場を守つて、的確な判断と作戦とを誤らなかつた彼ではあつた。彼の心の中にどつしりと腰を下して、彼に明確な針路を示したものは、社会主義の理論と、信念とであつた。

(俺だけじゃないんだ！ 三千の兄弟たちが、あの光り輝く工場の中の部署についている

三千の兄弟たち、あの工場以外のどの工場にも、労働者街にも溢れている、全プロレタリアの均しく背負っている苦痛なんだ。全てのプロレタリアが此苦痛に負けた時、どうなるんだ！ 勝て！ 俺一人位はいいだろう、と云う怯懦の中から、全プロレタリアの陣営が総崩れになるんだ。起て！ 此子供のためにも！ 俺が子供に贈物にする事の出来そうな唯一の望みは、プロレタリア解放運動の上にかかっているんだ！」

「ああ、行きやしないよ。坊やと一緒に行くんだからね。些も心配する事なんかないよ。ね、だから寝ん寝するの、いい子だからね」

「吉田君、早く来て呉れないと困るね 待つ……」

中村は口を噤んだ。

「ハハハハハ。誰かが待つてるのかい。いいよ。待つてる方は痺れを切らしても、逃げる
と云う事はないからね。今行くよ」

「お前、又長くなるのじゃあるまいね」

病み疲れた、老い衰えた母は、そう訊ねることさえ気兼ねしていたのだが、辛抱し切れなくなつて、囁くように言った。

「大丈夫ですよ。お母さん、直ぐ帰つて来ますよ、坊やを連れて行つて来ませ」

（大丈夫ですよ、向うの気の済むまで居て来ますよ。気休めに坊やだけ、向うまで連れて行ってやりますけれどね）と云う方が真実であった。

勿論、直ぐ帰れる筈のない事は、吉田には分り切っていた。劃時代的な二つの階級間の闘争が、全市から全日本の相互の階級を総動員して相對峙していたのだ。それは国際階級戦の一つの見本であった。

「連れて行ってくれる！　ね、父ちゃん。坊やを連れて行って呉れるの。公園に行こうね。お猿さんを見に行こうね。ね、そしてお芋をやろうね」

「ああ、いいとも、公園に行くんだ。そして公園でおとなしくお猿さんと遊ぼうね」

「公園に行こうね、おしやるしやんとあそぼうね」

子供は、吉田の首に噛りついたまま、おしやるしやんと遊ぶことを夢に見ながら、再び眠った。

（六時まで待とう。六時までにはきつと何かの情報があるだろう。依田が来るだろう。そうすれば、依田に顛末を知らす事が出来る、その上で行こう、六時にはピケツチングの交替になる時間なんだから、どうしてもそれまでは待たなければならぬ）

中村は「困るなあ、困るなあ」と呟きながら、品物でも値切るように、クドクドと吉田

を口説いた。

吉田の古い衰えた母は、かたつむり 蝸牛のように固くなつて、耳に指で栓をして、息を殺していた。

ひどい急坂を上る機関車のような、重苦しい骨の折れる時間が経った。

毎朝、五時か五時半には必ず寄る事になっている依田は、六時になるに未だ来なかった。

——依田君。六時まで、三時から君を待ったが、来ないから、僕はM署へ持つて行かれることにする。いずれは君にもお鉢が廻るんだろうが、兎に角警戒を要する。皆やられたんじや仕方がないからな。それから、こんな事は云えた義理ではないんだが、僕の留守の者たちの事も気にかかる。若し、出来ればおふくろや子供の面倒を見てやつて貰いたい。自重健闘を祈る。——

吉田は、紙切れに鉛筆で走り書きをして、母に渡した。

「これを依田君に渡して下さい。私はちよつと行つて来ますから。心配しないで下さいね。大丈夫だから」

老母の眼からは、涙が落ちた。

吉田は胸が痛かった。おそろしい悲しみと、齒齧みしたいような憤怒とが、一度に彼の腹の底からこみ上げて来た。

が、吉田はすべての感情を押し堪えて、子供を背中に兵児帯で固く縛りつけて、高等係中村と家を出た。

子供は、早朝の爽やかな空気の中で、殊に父に負ぶさっていると云う意識の下に、片言で歌を唄いながら、手足をピョンピョンさせた。

青空文庫情報

底本：「日本プロレタリア文学全集・8 葉山嘉樹集」新日本出版社

1984（昭和59）年8月25日初版

1989（平成元）年3月25日第5刷

初出：「不同調」

1927（昭和2）年1月号

※底本の親本（初出）の伏せ字は、底本では編集部によって復元され、当該の箇所には×が傍記されています。

入力：林 幸雄

校正：伊藤時也

2010年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

生爪を剥ぐ

葉山嘉樹

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>